

11:45 導入



授業の冒頭で、片岡先生が満州事変後の大まかな時代の流れ、重要な人物や用語などを説明した。生徒に「円安と円高、輸出に有利なのはどっちかな？」など、授業内容に関連した発問を繰り返しながら、先生自作のプリントの重要ポイントに下線を引くよう指示。重要度が一目で分かるよう、「非常に大切」を赤色、「大切」を青色で統一している。

授業
ハイライト

●3年生「日本史B」で、1930年代における「軍部の台頭」を学ぶ全2時間のうちの2時間目。日本が恐慌から脱出できた理由に関する演習問題に、教室内を自由に移動し、生徒同士で話し合いながら取り組んだ。(P.29に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

日本史

「なぜか」を絶えず問いかけ、
学び合わせる授業で、
生徒の論理的思考力を高める

片岡先生のアクティブ・ラーニング
生徒の考えるプロセスを重視し、
アウトプットの間を充実

片岡巧先生は、前任校で自身の授業を大きく見直し、現在の授業スタイルを確立した。それまでは、歴史的事象が生じた背景や因果関係を、関連する人物のエピソードなどを交えながら、詳しく解説する授業だった。生徒は熱心に耳を傾け、授業アンケートでも「授業が分かりやすい」



広島県立加計高校
片岡 巧 かたおか・たくみ

教職歴11年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。地理歴史・公民科担当。初任の時からアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業を試行錯誤してきた。

広島県立加計高校

◎旧制広島県立加計実業学校として開校。校訓は「誠実・自主・気魄」。自らの夢や目標の実現に向けて努力し、地域社会を支える人材の育成を目指している。生徒の課題発見・解決力の向上を重視し、学校設定科目「探究活動の時間」では、1～3年生が協働して菌類や農業といった様々なテーマについて研究する。

◎設立 1928(昭和3)年

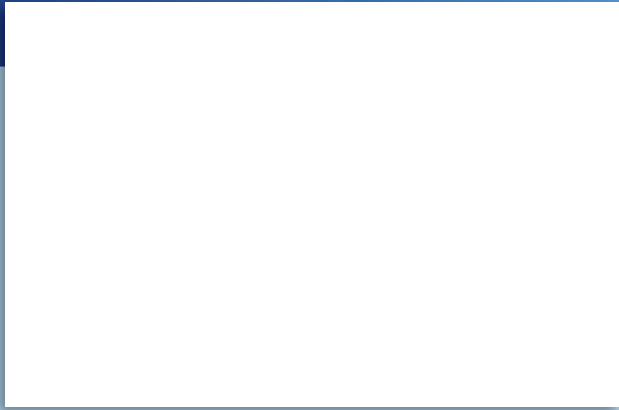
◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約35人

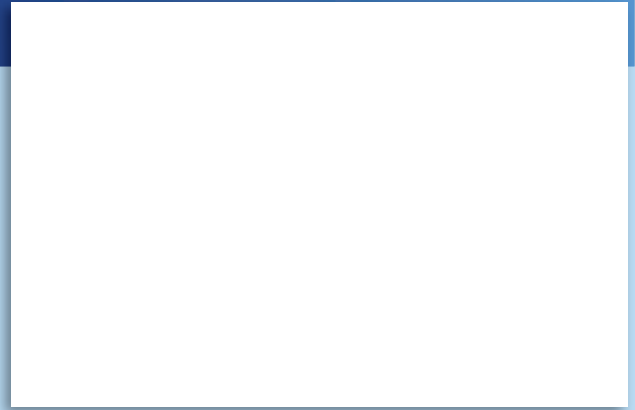
◎2018年度進路実績(現役のみ)

国公立大は、岡山大、広島大、島根県立大に6人が合格。私立大は、広島経済大、広島工業大、広島文化学園大、広島文教女子大に延べ5人が合格。専門学校進学13人。就職9人。

◎URL <http://www.kake-h.hiroshima-c.ed.jp>



次に、発展問題となる正誤判定問題のプリントに、生徒同士で学び合いながら取り組んだ。片岡先生は机間巡視しながら、苦戦している生徒に「向こうに分かっている人がいたよ」などと声をかけて、学び合いを促した。また、「断行」という言葉を「断る」という意味だと勘違いしている生徒がいたため、「断行とは、実行することだよ」と全体に説明した。



問題集の空所補充問題に、生徒各自で取り組んだ。問題に目を通し、まずは自分で考えて解答した後、教室を自由に移動し、生徒同士で学び合った。片岡先生は、全体に向けて「意味が分からない言葉があれば、用語集でチェックしよう」などと、アドバイスをした。制限時間の15分が経つと、片岡先生は、いったん手を止めさせ、生徒に自己採点をさせた。

といった感想が目立ったが、模擬試験などの論述問題では成績が伸び悩んでいた。

「教師が学習内容を分かりやすく説明するだけでは、思考力は育たないのだと痛感しました。また、ペアやグループによる話し合いでは、私は生徒の出す答えが正しいかどうかばかりを気にしていたのだと思います。知識を定着させるためにも、生徒の思考のプロセスをもっと大切にしなければならぬと気づきました」

そこで、教師が解説するのは重要ポイントのみとし、問題演習などのアウトプットとその振り返りを充実させることにした。さらに、生徒同士の話し合いでは、結論とともにその理由も述べるようにさせた。現在実践している「生徒に考えさせる」ことを重視した授業スタイルは、そうした試みの中で形づくられていった。

思考の活性化・深化への配慮

考えを深めるための手がかりにするよう、重要ポイントを最初に示す

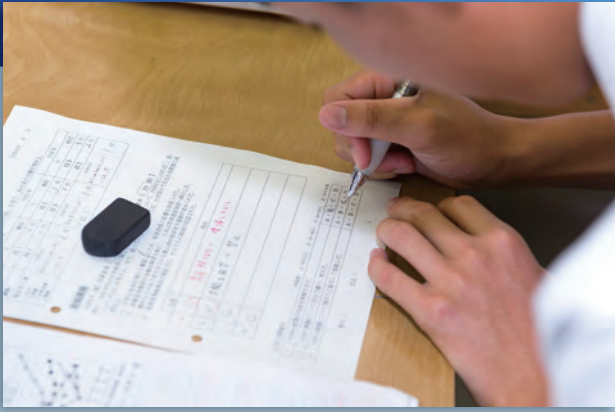
思考力を育むために授業で重視しているのが、「学習の見通しを立てる」ことだ。授業の導入部では、関連する既習内容についての発問を交えながら、本時の学習内容の概要を伝えている。今回の授業では、本時で扱う教科書や資料集の内容を整理・要約した片岡先生自作のプリントを配布。それをスクリーンに映写して、片岡先生が重要な人物・事件・語句などについて

説明し、それらに下線を引くよう指示をした。

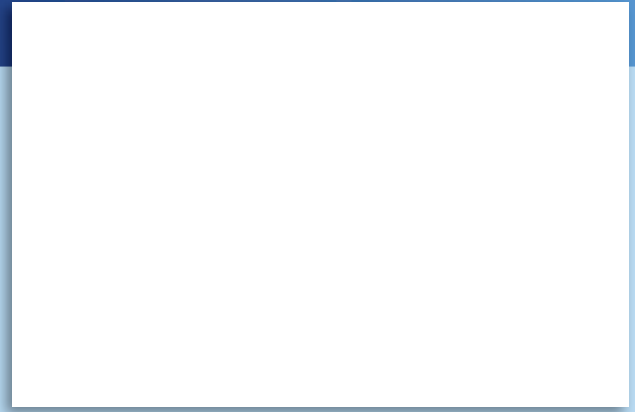
「生徒が学習内容の全体像を把握できるように、最初に時代の大きな流れを追わせています。下線を引くことで、重要ポイントを明確化し、生徒が考えを深めていく際の手がかりとするねらいもあります。なぜそれが重要ポイントなのかは生徒自身に考えさせるため、解説を詳しくしすぎないように注意しています」

生徒に歴史的事象の背景を考えさせた後、発問を交えながら詳しく解説

全体像を把握させた後は問題演習とし、生徒は教室を自由に移動して学び合う。1930年代の軍部の台頭を扱った今回の授業では、3種類の問題を示した。1つめは基礎課題で、教科書のグラフを読んで数値を抜き書きし、産業構造が変化したことを読み取る。片岡先生は教室を回りながら、「日本の産業構造の中で、重化学工業の占める割合はどうなっている？」など、考えるヒントを出した。2つめは標準課題で、基礎事項を確認するための空所補充問題だ。問題を解き終えた生徒は、教室の後ろに置いてある解答・解説のプリントを取り、自己採点を行った。そして、3つめは、発展的な内容の正誤判定問題だ。片岡先生は、全体に向けて「重要なのは、問題に正解するよりも、答えの根拠を考えることだよ」と繰り返し呼びかけ、「考える」ことへの意識づけを重ねた。そして、答え合わせでは、生徒に発問しながら、歴史的事象の背景や因果



最後に各自で自己評価を行った。今回の授業では、①今回の授業の内容を理解できた、②今回の課題について自分で調べ、考えた、③今回の課題について他の人と協力して取り組んだ、という3つの観点から振り返り、4段階で評価した。授業の形態によっては、プレゼンテーションについての観点を追加するという。



発展問題の答え合わせは、クラス全体で行った。片岡先生が生徒4~5人を指名し、答えとその根拠を問うとともに、「日本はなぜ金本位制に復帰したのかな?」「金の輸出を禁止することによって得られるメリットは?」といった発問もし、生徒がより深く考えられるようにしていた。その後、片岡先生が、金の輸出解禁から金輸出再禁止に至る背景などを解説した。

関係を詳しく解説していった。

「基礎的な問題演習は、生徒自身が知識を確認する場として位置づけているため、自己採点をさせています。一方、発展的な問題では、生徒が考えを深められるよう、『なぜか』を問いかけながら、私が解説します」

解説の時も、生徒同士で相談して先生の問いかけに答えられるよう、生徒は自分の席には戻らなくてもよいとしている。政治・経済・外交・軍事といった様々な観点を総合して考えてほしい場合は、発展的な問題として、「伊藤博文の暗殺は、アジアの歴史にとってどのような意味を持つのか」といった答えが1つではない問いを出し、生徒とのやり取りを丁寧に行う。

場づくりへの配慮

答えのよいところを見つけて褒め、生徒の自己肯定感を高める

現在は積極的に学び合う生徒たちだが、片岡先生の赴任当初は、学習意欲に課題がある生徒も少なくなかった。そこで、片岡先生の問いかけを生徒がペアで話し合うところから始め、徐々に学び合いの輪を教室全体へと広げていった。

「答えが間違っていたとしても、発想や着眼点、論理性など、何かよいところを必ず見つけ、褒めるようにしました。生徒の意識を学びに向かわせるためには、自分の考えが他者に認められ、受け入れられたりする環境が不可欠であ

り、教師にはそうした場を整える責任があると思っています。現在は、生徒の学習意欲をさらに高められるよう、発展的な内容の発問もするようになっています」

あまり親しくない生徒同士でも学び合いをしやすくするような工夫も行う。その1つが、学び合う相手を代える「シャッフルタイム」だ。今回の授業でも、2つめの問題演習の時間に、シャッフルタイムを2回行った。ほかに、「1回の授業で、男子・女子2人ずつの計4人以上と学び合う」といったルールを設定している。

「学び合いの最大のよさは、様々な人に質問しながら、分からない問題をじっくり考えられるところにあると思います。生徒同士が活発に動けるようになるためには、教師が介入する部分も必要だと考えています」

成果と課題

生徒の思考力をさらに高めるため、基礎事項の定着に力を入れる

「考えさせる」授業によって、生徒の学習意欲は向上している。休み時間などに自主的に学び合う生徒も少なくない。自分の考えをしっかりと持ち、それを表現できる生徒が増えていることも、大きな成果だ。

「定期考査では、毎回150~200字の論述問題を出しますが、どの生徒も何かしら解答を書くようになりました。アウトプットしようと

単元の指導計画

【教科・科目】地理歴史・日本史B 【分野・単元】軍部の台頭 【テーマ・作品】恐慌からの脱出と転向の時代 【設定時数】全2時間の中の2時間目 【単元目標】満州事変から国際連盟の脱退に至る日本の対外政策について、五・一五事件などの国内の状況も踏まえて考察できる。
 ・管理通貨制度への移行、新興財閥の台頭、思想的転向や学問への弾圧などを踏まえ、軍部の政治関与が増大した過程を考察できる。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	満州事変、政党内閣の崩壊と国際連盟からの脱退、転向の時代、二・二六事件	①「満蒙」の地域的広がりや地図から読み取っている。【技能】 ②柳条湖事件以後の満州事変～満州国建国に至る経過を理解している。【知識】 ③満州事変・満州国建国とそれに続く国家改造運動・テロ事件が日本の政治・社会や国際関係をどのように変えていったのかを考察し、説明できる。【思考力、表現力】 ④本時の課題について見通しを持ち、他者と協働してよりよい解答や表現を得ようとしている。【主体性、協働性】	①前時の復習と本時の予定と達成目標（活動のミッション）の提示（5分） ②授業プリントを使用して重要語句を把握させる（ICTでプリントを提示、生徒は基本的な歴史語句を2色のマーカーで重要度に応じて色分け）（10分） ③標準課題について、各自で問題内容の把握（3分）※何が問われ、何の教材を用いれば解答できるかを考える（見通しを立てる） ④標準課題の解答（15分）※学び合い活動（移動自由） ⑤標準課題の答え合わせ（3分）※個人ワーク ⑥発展課題（センター試験過去問プリント）の解答（5分）※短文の正誤判定、誤文の理由を論述、学び合い活動（移動自由） ⑦発展課題の答え合わせ（6分）※発表 ⑧本時の振り返り（3分）	【主体的な学び】 ・本時に取り組む課題の範囲と達成目標を量的・質的に示し、学習の見通しを立てさせる。（例：ミッション「全員が●●を解き切る」、▲人以上の人に教える・教えてもらうなど） ・学習活動ごとに活動時間を示し（口頭、スクリーンへの表示で）、時間感覚を持たせる。 ・授業中の発言、活動の様子を態度点として成績に加味することを明らかにする。 ・生徒の学習へのモチベーションを高めるため、小さな変化や成長について褒め、認め、寄り添いつつ、学習を促す。 ・授業の終わりに課題の自己採点と自己評価を行い、授業前後の変容などの自己分析を行う。 【対話的な学び】 ・本時に取り組む課題の達成目標、活動の態様を量的・質的に示し、対話的活動を促す。（例：ミッション「全員が●●を解き切る」、性別や普段の人間関係を超えてかかわる、▲人以上の人に教える・教えてもらうなど） ・授業中の発言、活動の様子を態度点として成績に加味すること、特に、積極的、行動的に他者に働きかける生徒に加点をすることなどを明らかにする。 ・適宜、机間巡視を行い、他者との対話・協働を促す。 【深い学び】 ・教科書の記述、授業プリントなどの資料、用語集の解説などを適宜組み合わせたり、照らし合わせたりしながら、考察し、表現するよう注意する。 ・対話的、協働的活動を通して、自分と他者の考えを比較したり、組み合わせたりしながらよりよい結果を求めるよう促す。	・課題（問題集、過去問題プリント等） ・活動の観察 ・発表 ・自己評価
2	恐慌からの脱出	①高橋財政の結果、産業構造が重化学工業中心に変化したことをグラフから読み取っている。【技能】 ②高橋財政後の日本経済の成長・拡大を理解している。【知識】 ③高橋財政が日本の経済・社会や国際関係をどのように変えていったのかを考察し、説明できる。【思考力、表現力】 ④本時の課題について見通しを持ち、他者と協働してよりよい解答や表現を得ようとしている。【主体性、協働性】	①前時の復習と本時の予定と達成目標（活動のミッション）の提示（4分） ②授業プリントを使用して重要語句を把握させる（ICTでプリントを提示、生徒は基本的な歴史語句を2色のマーカーで重要度に応じて色分け）（10分） ③教科書のグラフを見て、基礎課題（プリント）に取り組む（5分） ④標準課題について、各自で問題内容の把握（2分）※何が問われ、何の教材を用いれば解答できるかを考える（見通しを立てる） ⑤標準課題の解答（15分）※学び合い活動（移動自由） ⑥標準課題の答え合わせ（3分）※個人ワーク ⑦発展課題（センター試験過去問プリント）の解答（5分）※短文の正誤判定、誤文の理由を論述、学び合い活動（移動自由） ⑧発展課題の答え合わせ（4分）※発表 ⑨本時の振り返り（2分）	※1時間目も「教師の配慮」「評価方法」は同様	

*片岡先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。

生徒の声



「する姿勢は着実に身につけていると感じます」
 今後は、自分の考えをより正確に伝えられるよう、基礎的・基本的学力の確実な定着も目指す。
 「言葉の意味が分らないと、教科書や問題文の記述を正確に把握できず、理解が止まってしまいます。そのため、語彙力の育成も今後の課題の1つです。思考力を伸ばす指導と知識を増やす指導の両方を充実させることで、生徒の学習意欲をより高めていきたいと思っています。そうして、シャッフルタイムがなくても、誰とでも活発に学び合うことができるようになることを目指していきます」

村松航也さん 歴史は暗記科目だと思っていました。それが思い込みだったと、片岡先生の授業で気づきました。クラスメートと意見を出し合いながら、事件や出来事が起きた要因を考えると、学習内容が自然と頭に入っていきます。授業で「なぜ？」と向き合う中で、仮説を立てて確かめるという習慣も身につきました。

齊藤涼奈さん 片岡先生の授業で実感したのは、他者に説明する難しさです。クラスメートに納得してもらうために、詳しい説明ができるよう、教科書や資料集を何度も読み返します。そうした中で、自分の理解も深まったためか、以前はなかった「なぜ？」と思うことが増えてきています。新たな疑問を解消するため、自分で学ぼうという気持ちも強くなりました。